

## 第16回（2021年）政治経済学・経済史学会賞

### I. 受賞作品と受賞会員氏名

- (1) 小島庸平著『大恐慌期における日本農村社会の再編成—労働・金融・土地とセイフティネット—』（ナカニシヤ出版、2020年2月）。
- (2) 竹内祐介著『帝国日本と鉄道輸送—変容する帝国内分業と朝鮮経済—』（吉川弘文館、2020年12月）。

### II. 授賞理由 (1)

本書は、大恐慌期を契機にして形成された「現代資本主義社会の性格」についての理解を深めるために、農村社会を対象にして、労働・資本（金融）・土地の三大生産要素における「セイフティネットの制度化」の形成過程を実証的・論理的に論証した研究書である。大恐慌期を分析するにあたり、本書では2つの方法が採用されている。1つは、世界大戦・大恐慌による市場メカニズム麻痺によって形成された「セイフティネットの制度化」という金子勝の方法を援用し、三大生産要素の「商品化の無理」に着目することであり、もう1つは、「人々の主体的な努力をあらためて内在的に吟味することで、大恐慌が日本社会に与えた影響」を再検討し、「現代資本主義社会の性格」の理解を深めることであり、そのために「社会」の次元で検討するとして、「広義の福祉国家」論や「福祉の複合体」論が援用されていることである。

本書は3つの部に編成されている。第I部「労働」では、救農土木事業などによる雇用創出過程を中心にして、経済・財政政策と農家所得・賃金の関係、山林入会権解消と山林利用の拡大、満州移民からの送金などを実証している。第II部「金融」では、無尽、頼母子講などのインフォーマル金融が成立する条件についてインターリンクージ論を援用して検証し、地主・小作の従属的關係が維持される機能についても実証したうえで、昭和恐慌を契機に産業組合の信用事業が拡充する過程を論じている。第III部では、「土地」をめぐるセイフティネットとして農業保険制度や農業災害補償制度が導入される過程を実証している。以上による分析の結果、大恐慌期は、旧来型のセイフティネットを解体・再編・利用しつつ、新たなセイフティネットが一定の機能を発揮し、戦後に接続されたと評価している。

本書で何よりも評価できる点は、研究史への幅広い目配りと課題・分析結果のくりかえしの整理・位置づけを通じて含意を明確にし、セイフティネットにかかわる幅広いテーマ設定と豊富な個別事例の実証から歴史的意味を探っていることである。とくに「労働」における救農土木事業の詳細な分析は研究史への貢献が高く、「金融」「土地」においても幅広いテーマが実証的に考察されている。研究史の理解と整理、課題の設定、個別事例の分析、終章における総括と展望の各所において、議論を集約して評価が下されており、研究書として総合的に高い水準を確保している。大恐慌期については厚い研究史があるものの、本書は研究史の十分な咀嚼と的確な援用、幅広い実証の努力、それらを総合的にまとめ、大恐慌期の歴史的な位置づけを改めて与えたものとして、本学会賞に十分値するものと評価できる。

その点を認めたくえで、本書の個別実証を論理にする方法については、なお議論の余地が残されているように思えた。この点は2つあり、1つは、本書で援用された「セーフティネットの制度化」の位置づけと応用をめぐり、たとえば、本書では終章でポラニーが引用されているが、「商品化の無理」を議論するのであれば、ポラニーから説き起こすべきではなかったか、あるいは、本書の個別実証は、「商品化の無理」という論理を援用したことで、十分に深めることができているのか、などである。2つには、本書の個別実証は三大生産要素に集約されているが、救農土木事業を「労働」に集約する点や、保険制度を「土地」の問題に集約する点は、少し強引な印象が残った。本書の実証と論理のあいだには、なお乖離があり、その点の接続が課題として残されているように思われる。

ただし、このような課題に著書は十分自覚的であると思われ、今後の研究の進展が期待される。研究書としての総合化の努力は本書の大きな魅力であり、本書は学会賞にふさわしい内容と水準を十分に確保している。

## II. 授賞理由 (2)

本書は、日本帝国下の朝鮮における鉄道敷設を契機とする商品市場の創出と域内分業の形成を通じた経済成長のあり方を解明するものである。本書では、輸送手段の急速な拡大による域外への商品販売の拡大、商品の流入を、大量の鉄道貨物データを整理し、一貫した方法で丹念に市場の浸透過程を検証している。近年のアジア経済史研究では、先進国からの工業製品の流入と同時に1次産品輸出を起点に購買力の上昇と消費拡大、さらなる市場の拡大、やがて輸入代替工業化の進展といった経路による経済成長や、アジア間分業の深化などが注目されている。本書は、開港以来帝国日本の経済圏に包摂され、日本との分業構造に組み込まれながら、独自に地域内分業を深化させ市場経済を浸透させていった朝鮮の地域市場構造とその変化を詳細に検討している。それは、堀和生のアジア間分業論や金洛年キムナクニョンの農業余剰の資本転化と工業化といった工業化論の成果を踏まえながら、朝鮮内の都市と農村、工業化と新興都市の市場形成を解明するものである。その成果は、従来見られた朝鮮経済の内発的発展の破壊論や日本資本と民族資本の断絶した二重構造論的展開といった植民地的に抑圧された経済史観の見直しを迫るものになっている。

本書は3部から構成され、第I部「鉄道敷設と貨物輸送の朝鮮的特質」では、朝鮮における鉄道敷設と並行して沿線人口の拡大が見られたこと、日本帝国圏への包摂によって朝鮮域外分業の急拡大が生じ、その後朝鮮内輸送が拡大し、1930年代の工業化の進展につれて顕著に拡大したことが指摘される。台湾との比較では地域差の大きい朝鮮では都市と農村などの域内分業が急速に進むことなどが指摘される。第II部「帝国内分業の変容と朝鮮市場」では、米、綿製品、鉱産品をめぐる日本帝国内分業の進展が朝鮮内市場形成に繋がる域内分業構造の変化を追っている。大量の対日米輸出の一方で満洲からの粟輸入が不足を補い、やがて都市部では米消費、農村部では麦消費の拡大が見られることなど、地域ごとの消費の変化が見られた。綿製品輸入は京城キョンソングを通じて各地に運ばれ農村でも市場を拡大したこと、朝鮮で産出される粗悪炭をめぐる域内市場、工業用石炭の対外依存などによる北部工業都市や家庭用炭などでそれぞれの消費市場が形成されたことが指摘される。第III部「鉄道輸送と地域経済」では、黄海道ファンヘドの朝鮮鉄道黄海線、咸鏡北道ハムギョングクの南満洲鉄道北鮮鉄道の事例から、1次産品経済地域から近接地域の鉱工業化に伴う都市化、消費市場化が進展する様相を明らかにしている。

本書は日本帝国経済の分業構造の変容と朝鮮地域経済の分業の拡大を詳細に解明したものであり、朝鮮の

経済成長や、代替工業化と帝国圏分業の変容に豊かな肉付けを与えるものである。また、解放後の発展のあり方や、南北に分断された地域構造の問題にも重要な視点を提供している。鉄道から見た「消費生活経済史」といった領域への入り口を垣間見せる点でも貴重な研究である。データが乏しい領域で、これまであまり利用されることがなかった鉄道貨物統計を駆使して多くの発見をした功績は大きい。数量の変動原因を子細に追うことができないことや、鉄道敷設と人口移動や都市化の関係などは追い切れないなど、資料の性格上の限界はあるが、一方で米と粟の非代替性、セメント輸送量と都市化の関係など斬新なデータ解釈が示されている。今後の研究への貢献は大きく、本学会賞に十分値するものと評価できる。

その上で、2つの点で著者の見解が示されてもよかったと思われる。1つは、著者が敢えて捨象している市場における「民族性」や「階層性」について。資本市場における日本資本の位置、都市内部における棲み分けなど、固定的に見える植民地的構造は、本書の分析を踏まえるとき、市場経済の拡大浸透のなかで、日本人と朝鮮人の経済関係が実際には格差をとめないながらも、接点をもち、融合する側面があったように理解できるが、そのような理解で間違いないのか。著者の見解を今少し聞きたかった。2つ目は、開港や鉄道敷設以前の貨物輸送と敷設後の変化について。言い換えれば在来的な発展の単なる抑圧でないとすれば、李朝期からの物流の担い手たちに鉄道敷設とその拡大はどのような意味をもったのか。本書は堅実な論証に徹しているが、禁欲的な著者にさらなる論旨の展開を求めたい。こうした若干の物足りなさが残るものの、本書を起点に多くの研究が生まれることも期待ができる。データ分析の堅実さの上に朝鮮各地の地域的特性を捉え、朝鮮近代経済がたどった道りを総合的に解明した本書は学会賞にふさわしい内容と水準を十分に確保している。

2021年10月23日

第16回学会賞選考委員会 委員長 大門正克  
出雲雅志  
山崎志郎  
安藤光義  
馬場 哲